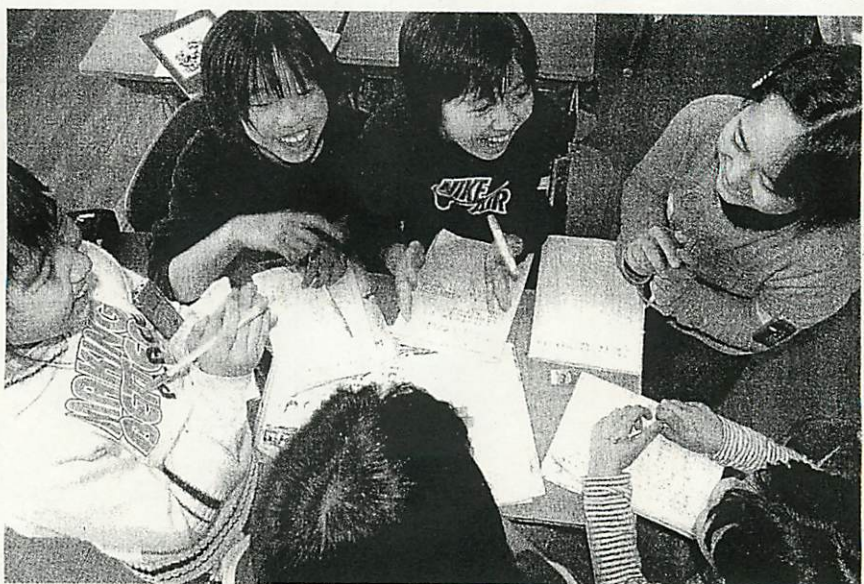


教師黒子 教えない授業

児童同士相談 知恵絞る



初めて授業参観に訪れた保護者は、面喰らった表情で「さ、言いたいだ。これって世に言う学級崩壊じゃないの？」

「見ると、教室は無法状態。児童は好き勝手に立ち歩き、床に盛り込んで話を始めるグループもある。「教員が子ともに知識を伝達する」という伝統的な授業とは懸け離れた光景が広がる。

群馬県高崎市郊外にある八幡小学校。二年前から、子ども同士の教え合っ方を信じ、教員が黒子に徹する「学び合い」の実践に取り組んでいる。

授業時間を増やし、「教え込み」に軸足を移しつつある昨今の教育改革とはひと味違う試み。「先生が教えない授業」なのに、子どもたちの学習意欲はなかなかどうして、高まる。一方で、「同じ備えを持つ漢字をまとめて意味を考えよう。三年生の国語の時間。担任の平野くに子さんが、この時間の学習目標を黒板に書き込んだ。

早速、作業に取り掛かる子どもたち。教科書の巻末

「初めは教えない欲求を抑えるのに苦労した」と平野が言うように、「学び合い」を始めるに当たって教員に抵抗がなかったわけではない。単なる放任につながるかかわらないとの懸念もあった。

ところが、それまで教室で座っているだけの「お客さん」だった児童が減っていき、教員にも手応えが生まれた。今では「学び合い」が全授業のうち約六割を占める。

実は、やる気を促すべく「少しでも予備知識を仕入れてから聞きに行こう」「自分だけでできないのは恥しくない」と。

そんな、背伸びが、学習意欲を刺激し、帰宅後にも予習や復習に向かわせる効果を発揮する。

社会科を教える青木幹昌さんは、勉強のよくなる子どもが、普段は自立した手子に声を掛けられるのを自慢していた。「おまえに教わると思わなかったよ。たまたま一言をきっかけに、その子の新たな一面が当たり子どもたちの中にある固定観念を描きかっけよう。

八幡小の教員は口をそろえて、自分たちの知っている子どもの姿なんて、「一部だ」と思い知らされた。「学び合い」が一番変わったのは、われわれ自身かもしれない。

「習熟度別学習にも取り組んだが成績は頭打ち。学力だけでなく、学習意欲も向上させる方法はないかと模索している時に「学び合い」に出会った。校長の学力は明快。

「習熟度別学習にも取り組んだが成績は頭打ち。学力だけでなく、学習意欲も向上させる方法はないかと模索している時に「学び合い」に出会った。校長の学力は明快。

「習熟度別学習にも取り組んだが成績は頭打ち。学力だけでなく、学習意欲も向上させる方法はないかと模索している時に「学び合い」に出会った。校長の学力は明快。

それもいい

「そう、そう」「それもいいよね。」社会科の「学び合い」で、友人の意見に耳を傾ける4年生の女子。活発な会話は授業が終わっても続く＝群馬県高崎市の八幡小学校 (撮影・名古屋隆彦)

「習熟度別学習にも取り組んだが成績は頭打ち。学力だけでなく、学習意欲も向上させる方法はないかと模索している時に「学び合い」に出会った。校長の学力は明快。

取り組む学校全国に

発言機会増え 思考力を養う

「学び合い」は上越教育大教授の西川純司さんが提唱し、現在、全国で約二十校の教員が取り組んでいる。逆い言葉は、

「習熟度別学習にも取り組んだが成績は頭打ち。学力だけでなく、学習意欲も向上させる方法はないかと模索している時に「学び合い」に出会った。校長の学力は明快。



学び合い

二〇〇三年実施の経済協力開発機構(OECD)の学習到達度調査(PISA)で、日本の高1生は読解力の低下とともに、数学などへの学習意欲も先進国平均より大幅に低いことが分かった。

教員が授業の主導権を握るのは、悪貨を説明する最初の五分間だけ。

「初めは教えない欲求を抑えるのに苦労した」と平野が言うように、「学び合い」を始めるに当たって教員に抵抗がなかったわけではない。単なる放任につながるかかわらないとの懸念もあった。

ところが、それまで教室で座っているだけの「お客さん」だった児童が減っていき、教員にも手応えが生まれた。今では「学び合い」が全授業のうち約六割を占める。

実は、やる気を促すべく「少しでも予備知識を仕入れてから聞きに行こう」「自分だけでできないのは恥しくない」と。

そんな、背伸びが、学習意欲を刺激し、帰宅後にも予習や復習に向かわせる効果を発揮する。

社会科を教える青木幹昌さんは、勉強のよくなる子どもが、普段は自立した手子に声を掛けられるのを自慢していた。「おまえに教わると思わなかったよ。たまたま一言をきっかけに、その子の新たな一面が当たり子どもたちの中にある固定観念を描きかっけよう。

八幡小の教員は口をそろえて、自分たちの知っている子どもの姿なんて、「一部だ」と思い知らされた。「学び合い」が一番変わったのは、われわれ自身かもしれない。

(敬称略) 文、写真、名古屋隆彦、グラフィックス(安藤大輔)